

特異点・カルデア 【世界を救え
なかった少年の話】

トクサン

人類の存亡を掛けた最終決戦、そこで藤丸立香は辛くも勝利を収めるも大切な人であるマシユ・キリエライトを失ってしまう。

彼にはそれが耐えられなかった、認められなかった。深い絶望と後悔の果てに彼は願ってしまう。

【もう一度チャンスを、今度はもっと上手くやる】

繰り返す世界、磨かれる魔術師としての素養。けれど幾ら力をつけても彼女は命を落とす。やがて擦り切れた心を見抜いた英霊達は彼の元を離れ、数人の英霊のみと共に人理修復に臨み、失敗し続けた。

そんな彼の元に——英霊を引き連れた、一人の少女がやって来る。

目次

無白

特異点IF…失われた色彩、
取り戻す為に

無白

そうだ、僕には救いたい人がいた。

随分長い事旅をした、共に戦った仲間達。僕の隣には常に誰かが居た気がする、眼鏡の似合う——そう、穏やかで、優しく、常に正しさを胸に抱いた、大切な誰か。

僕を守ってくれたその人の背中を良く憶えている。

彼女は大きな盾を持っていた、その盾で常に僕の前に立ち、どんな攻撃も、苦難も防いで守ってくれていた。

「大丈夫です、先輩」って。

笑って、最期までそう言ったんだ。

僕は——僕はその人を、忘れてはいけない気がするんだ。

あれは——そう、あれは、確か。

僕の。

僕の大切な——大切な人。

☆

「アアアアアあああ——ああアアアアッ!!」

心は鋼だ、決して折れる事のない鋼。

幾多の傷をその身に刻みながら決して折れず、曲がらず、壊れる事を良しとしない鋼の心。それはあらゆる苦難と困難を乗り越え、この場所まで僕を運んできた。魔力も力もない僕が唯一誇れる武器、それがこの心。

精神の在り方。

それが無残にもボロボロに、ズタズタに。

破壊されてしまった。

「ああ、アアアアッ！ マシユっ、マシユッ！ 嘘だ、ああ嘘だ、嘘に決まってるッ！ ああ、クソ、クソッ！ ロマニ、ロマニ居るんでしょう!? 何とか、何とかしてくれ、マシユがッ、マシユがあアアアッ！」

叫びながら地面を転がって喚いた。

何でも出来る訳じゃない、僕は天才のレオナルドとは違う。ただの凡人で『たまに最後のマスターになってしまった』というだけの男だ。唯一の武器だと豪語する鋼の精神だって——最初から持ち合わせていた天の才じゃない。そうする事でしか身を守れなかったから身に着いただけの急造品だ。

場所は割り振られた自室、マスターの部屋。

そこは暗く、明かりが無い。辛うじてベッド近くのライトスタンドが点滅を繰り返しているが、拉げて地面に転がったソレが放つ光は余りにも弱弱い。恐らく僕の仲間がこの部屋の惨状を見たら驚くだろう。ベッドのシーツはズタズタで、飾ってあった花瓶やら植物やは地面に散乱している。

そこで皺くちゃの服を着た僕が暴れて、喚いて、扉を叩いていた。

本来の主である僕の命令でも扉は開かない、殴っても、カードを翳しても同じ。何故なら此処を閉ざしているのが天才レオナルドダヴィンチだからだ。彼女——いや、彼の命令で今現在、この部屋の周辺には誰もいないし、ロックが解除される事も無い。

レオナルドは言った、僕は今心が壊れてしまっているのだと。

だからこうして閉じ込めて、僕が勝手に復活するのを待っている。最初は色んな人が色んなことを僕に言った。軒並み元気づけたり、奮起を促す言葉だった。けれど僕はその悉くを跳ね除け、同じ事を叫んだ。

僕達は最後の戦いに勝った。

けれど無傷じゃない、勝った代償に大切な——大切な人を失った。

僕の鋼はその傷に耐えきれなかった。

何度も扉を殴り付けたせいで手がボロボロになっていた。血も出ている、涙と鼻水でドロドロの顔面をそのままに、僕は力なく扉を叩く。誰も何も言わない、誰も何もしてくれない。受け入れると、言外にそう言われている様な気がして。僕はどう枯れ果てた涙を零した。

「う、ううッ……マシュ、マシュッ……！」

地面に這い蹲って震える。嗚咽を零して涙を流す、泣いても泣いても心の穴は埋まらない。彼女は帰って来ない、ロマニも帰ってこない。大切な人を二人欠いて、僕の心は押し潰された。何とかかなると思っていたんだ、ここまで何とかしてきたんだ。だから、今回も大丈夫だって。

嫌だ、僕は彼女を——二人を失いたくない。

失っちゃ……失っちゃいけない人なんだ、彼女は。

『先輩！』

脳裏を過る彼女の後姿。振り向き、自分に微笑む彼女。その情景を思い出す度に心が軋む。

失った余りの寂しさに、悲しさに、その存在の大きさに。罪悪感と無力感と喪失感に苛まれる。這い蹲ったまま地面を何度も殴った。痛みなんてもう感じない、それよりも誰でも良い、この喪失感を——虚しさを消してくれ！　そう強く願った。だからだろうか、もし神様という奴が居たのなら。

神代ではない、現代の。

何か宇宙全てを眺める様な神様が、僕にチャンスくれたのだとしたら。
カラン、と。

目の前に何かが転がった。

それはいつか特異点で回収した——聖杯だった。

本来ならば嚴重に保管すべきそれ、確か仲間の一人が『豪華な聖杯で酒を飲んで

みたい』などと馬鹿な事を言い出し、ロマニからくすねたまま部屋に保管していた『願望成就』の器。

僕の前にソレが転がっていた。

「……聖、杯」

呆然と呟いた。

血と汗に塗れた手を伸ばして、転がった聖杯を掴む。ひんやりとした感触、黄金のソレを眺めて思う。これはあらゆる願望を、願いを叶える万能の杯。

どんな願いも——そう、どんな願いだって叶う器だ。

「僕は——僕は」

聖杯の使用は仲間の霊基再臨、その限界突破を除いて禁止されていた。けれど僕の思考にそんな規範を思い出す余裕はなく、『あらゆる願望を叶える器』を前に。ただの人間である僕は想って——願ってしまった。

「やり直したい」

彼女が消えてしまう前に。

「戻りたい」

まだ生きていた彼女に会う為に。

「今度はもっと……」

彼女を救うために。

「上手くやるから——！」

そう告げると、聖杯が輝きだし世界を包んだ。自室に光が溢れ、その光は瞬く間に僕を覆っていく。それを見た僕は願いが聞き届けられたのだと理解した。もう一度、過去へ、前の世界へ。

彼女の死のない未来を掴むために。

今度は——今度こそ。

大切な人を救うために。

光が消え去った時、部屋の主の姿は何処にもなく。

ただ真っ白な花びらが一枚、地面に残されただけだった。

☆

繰り返す、繰り返す。

同じ世界を救う旅程を、同じように歩いて、同じように戦って。いや、同じではない。今度は上手くやると言った様に、今度こそ彼女を救わなければならない。その決意を抱き、世界を回った僕は今まで以上に努力し、必死で戦い、成長しようと足掻いた。

一度目よりも上手くやれたと確信していた。より多くの仲間を集め、自分自身を鍛え、来たる最後の戦いに備えた。やれることは全てやったと言って良い、文字通り最善を尽くした。

それでも彼女は死んだ。

それでも駄目なのかと絶望した。また涙が枯れる程に泣き喚いた。そしてもう一度、次こそはと願い、聖杯を握った。三度目の世界、今度こそ、今度こそはと。少しでも強くなった魔力を携えて再び挑んだ。

三度は四度に、四度は五度に、五度は六度に。

焦燥感だけが募っていた、何度やっても駄目だった。繰り返し繰り返し、馬鹿の一つ覚えの様に自分を追い詰め戦い続けた。カルデアの仲間達が僕を心配するほど

の訓練と実践を積んだ。これ以上は無理だと言う程に努力した。周回を重ねる毎に僕の体は僅かずつ変化し——強くなっていく。

けれど、それでも。

何度挑んでも、彼女は死に絶えてしまう。

同じ事を繰り返す。同じ出会いを、同じ戦いを、同じ食事を、同じイベントを、同じ風景を、同じ言葉を、同じ時間を。

心が死んでくのが分かった、どれだけ頑張っても。どれだけ努力しても、彼女の死を止める事が出来ない。圧倒的に力が足りていないのだ、相手の力は膨大で力量差は歴然。それでも『彼女が死なない未来』を掴むために、必死になって頑張った。

駄目だった、もう一度。

失敗した、もう一度。

死んでしまった、もう一度。

救えなかった、もう一度。

そうやって何度も何度も繰り返し、失敗し、絶望する度に心に罅が入って。ある時思ふんだ。

「あれ、何で僕はこんな事をしてるんだろう」って。

何回も何回も、同じ世界、同じ事を繰り返していく内に僕は何でこんな事を繰り返しているのか分からなくなった。何で同じ事を繰り返しているのか、何でこんな辛い思いをしなくてはいけないのか。けれどその理由さえ定かじゃなくて、僕は世界を救う度に聖杯に向かって願う。「やり直したい」と。

けれどある日を境に少しずつ、本当に少しずつ——仲間が減って行った。

召喚に応じる英霊が少なくなっていくのだ。まるで僕自身を嫌う様に、いつも見ていた顔ぶれが少なくなっていく。何度も絆を結んだ彼、彼女達の姿が見えなくなる。それでも止める事は出来なくて、僕はすっかり寂しくなったカルデアで今日も戦う。例え英霊に見捨てられたとしても足を止める事は出来なかった。

そして、その弊害は遂に他の世界にまで。

神代の世界にて、彼の英雄王は僕を見て言った。

「つまらん男だ」と。

まるで吐き捨てる様に、心底侮蔑の瞳を携えて言った。僕はそれを何の感情も灯らない、無機質な瞳で聞いていた。あれ、何だかいつもと台詞が違う気がする、な

んて思いながら。

そして僕らのカルデアはいつの間にか——ほんとうにいつの間にか、数名のサーヴァントを除いて誰も居なくなってしまった。あれ程賑やかで、戦力的に充実していた筈の天文台は静寂に満ちていた。最後の特異点を前にして途方に暮れる、こんな事は今までなかったのに。数多の魔神柱を前にして、手元の戦力は余りに心許なかった。

呼んでも誰も来ない、来てくれない、応じない、召喚されない。

だから当然、僕らは敗北する。僕の手元に残ったサーヴァントはたったの三人、彼等は最後まで勇敢に戦い、笑って、或は罵って、呆れて——最期に寂しそうに僕を見て消えて行く。僕はそんな彼らの最期を無機質な目で眺め、それから呟いた。

「またやり直しかな」

いつも肌身離さず持っている一つの聖杯、それを握り締めながら呟く。聳え立つ魔神柱、負ける度に、失う度にやり直して来た。けれどゲーティアまで辿り着けなかったのは初めてだった。

「また最初からだ——ねえ、マ」

誰かの名前を呼ぼうとして振り向いた。

誰かの名前を呼ぼうとして——その誰かが誰だったのか、僕自身分からなくなつて、名前が詰まった。振り向いた先には誰も居ない、僕の手元に居たサーヴァントは皆消えてしまった。だからもう、戦力として英霊は存在しないハズなのに。僕の口からは誰かの名前が零れそうになっていた、誰かも分からない、けれど確かに存在していた。

僕の大切な。

聖杯が光を帯びる、僕の願望を感知した聖杯が時間を巻き戻す。もう何度も何度も繰り返した世界に、時間の中に。その【誰か】を救うために巻き戻していたのに、その【誰か】を救うために強くなったのに。その大切な【誰か】はとつくの昔に、僕の記憶と世界の記憶から消え去られていた。

「あれ……」

手元の聖杯からドロリと、光が滴る。

もう誰かも分からない人の名前を呟き、けれど頭の中に浮かんだ【誰か】の顔は——真っ黒に塗りつぶされて良く分からなかった。

「マシュ——？」

☆

何回世界をやり直したのだろうか、もう全ての記憶が朧げだった。擦り切れた世界は酷く断片的で、古びたフィルムのように。酷い冗談だ、今はもう全て。誰かを救うためにやり直したというのに、その誰かの事も憶えていない。やり直す度に、少しずつ、少しずつ、僕の中に在った大切な何かが消えていく。そして中身が空っぽになって、残ったのが今の僕。

世界は暗闇が支配していた。世界は恐らく滅んでしまったのだろうか、カルデアを中心に虚空が広がっており、今や僅かばかりの空間が残っているだけ。局員は誰も居ない、レオナルドも、この世界に残っているのは僕と——三人の英霊だけ。

もう召喚に応じてくれるのは彼等だけになってしまった。もう少し前まではルーラーが召喚に応じる事もあったのだけれど、彼等、彼女達は僕を見ると顔を蒼褪めさせ、それから鬼の様な形相で襲い掛かって来るのだ。

「貴方はッ……世界を歪めている！」

召喚されたサーヴァントがマスターに齒向かう何て余程の事だ。残念ながらカルデアの令呪は零基回復・魔力装填・再起にしか使用出来ない。だからこそ洩々残った三人のサーヴァントと協力し、召喚したばかりのルーラーを殺害する。

そこからはもう、僕は追加で誰かを呼ぼうとは思わなくなった。味方ではなく、敵を増やしてどうするのだと。けれどルーラーの襲撃は予想以上に僕の心にダメージを与えた。

手元には聖杯が一つ残っている、けれど僕はこれを使わず、ただ無為に時間を過ぎていた。毎日寂れ、埃に塗れたマイルームのベッドに腰かけ俯く。自身の体を見下ろすと随分と変わってしまったなと思った。白かった肌は浅黒く、体には無数の傷が刻まれている。数えるのも億劫な修羅場を潜って来た、錬鉄の英雄に劣らぬ——いや、それ以上の脅威と天災を幾度も退け、生還して来た。

人類の歴史、その保障。その旅を何度も何度も繰り返し人としての域を超える。恐らく過去のあらゆる英霊であってもこれ程の世界を味わう事はなかっただろう。そう言えば救いたかった誰かの名前も忘れただ惰性で世界を繰り返していた時、

局員が自分を見る目は人間ではなく——もっと恐ろしい何かを見る様な目で見たのを思い出した。サーヴァントが召喚できず、その分の戦力を己が補完しようとしたのが間違いだったのか。恐らく半分どころか殆ど英霊の領域にどっぷり浸かってしまっている。最初からこの力があればと僕は思わず笑みを零した。

世界を歪めたと、ルーラーは言った。

僕は世界を歪めてしまったのだろうか？ 天井を見上げながら思った。多分そうなのだろう、誰も召喚されない運命システム、居る筈なのに居ない誰か、ルーラーに襲われる人類最後のマスター。最初の僕はどんな人間だった？ そんな事はもう、憶えてはいない。

「あの人が今の僕を見たらどう思うかな」

呟き、軽薄に笑う。

もう記憶の中にある【誰か】の名前すら、僕は想い出せなかった。

「マスター」

部屋に誰かの声が響く。聞き慣れた声だった、声のした方に顔を向ければ深緑のマントを纏った彼が部屋の扉に凭れ掛かっていた。いつの間に、独り言を聞かれて

しまっただろうかと思わず頬を搔いた。

「侵入者だ、どこの誰だかは知らないが英霊を率いている、魔術師の様だ」

「へえ、魔術師、それにマスターか、驚いた、この世界は終わったものだとばかり思っていたけれど……なんだ、人類最後のマスターだなんて、まだまだ大丈夫そうじゃないか」

「……取り敢えずは他の連中と迎撃に当たるぞ」

「戦うのかい？」

「当然だ、連中の狙いはお前だろう」

彼の言葉に僕は面食らって、それから「そっか」と寂しそうに笑った。何となく、その侵入者とやらの正体が分かった様な気がしたのだ。いつか来るのではないかと思っていたから。そっとベッドから立ち上がると最後まで僕の味方をしてくれた英霊——巖窟王に笑って告げた。

「皆を集めよう——カルデアスの所へ、戦うのなら、あの場所が良い」

「ここは——カルデア？」

突如出現した特異点、そこに乗り込んだ藤丸率いるレイシフトチームは周囲の見慣れた景色に驚きの声を上げた。随分と寂れ、埃を被っているが間違いない。自分達の良く知る天文台、その施設そのものだ。けれど白く清潔に保たれている筈のそこは、まるで廃墟の様な有様だった。何年も放置されている——いや何年どころではない、十年、二十年放置されたかの如き荒廃具合。これにはマッシュを含め、他の面々も戸惑いを隠せない。

「カルデアに特異点？ いえ、でも……此処は私達の知っているカルデアじゃない」

「……反応はこの先です、先輩」

「うん、行こう、マッシュ」

見知った場所だ、道は全て知っているし迷いはない。ただレオナルドの指示通り、反応が強い方へ足を向ける。そして辿り着いたのはカルデアスの存在する一室、広々としたその部屋を前にして一度息を呑み、それから全員で一斉に突撃した。

「——えっ」

そして飛び込んで来た光景に、藤丸とマシユ、そして他の英霊の面々も足を止める。部屋の有様は予想した通り、廃れたその様子は驚きに値しない。問題は光を失ったカルデアス、その下に佇む一人の少年、そして三人の英霊の存在だった。

少年は黒い髪を腰の辺りまで伸ばし、光を失った蒼い瞳で此方を射抜いていた。鍛え抜かれた肉体、剥き出しの上半身に魔術礼装の名残である黒いズボン。その体には無数の傷跡、火傷、切り傷、矢傷、打撲痕、それらが散りばめられている。

少年——いや、青年と呼ぶべき彼は部屋に飛び込んで来た藤丸たちを一瞥すると、ふっと口元を緩めて笑った。それはおかしいものを見たというより、自分の予想が当たった事による歓喜からくる笑みだった。

「……そっか、うん、そうなるのか——まあ、何となくそんな気はしていたんだ」「ふん、来るのが分かっているなら対策の一つや二つ、立てておきなさいよね」

「おー？ お？ 何だ、コイツ等と戦うのかよ？ 最弱英霊の俺にはちっと荷が重いぜマスター？」

カルデアスの元、マスターの傍に侍る三人の英霊。

ジャンヌダルク・オルタ、アンリマユ、巖窟王。

彼等はそれぞれ反応を見せ、それから全員がマスターの為に戦う意志を見せた。藤丸は目の前の少年に目を向けながら、パクパクと口を開閉させる。マシュは困惑していた、目の前の少年から感じる雰囲気——いや、懐かしきと言うべきか。それが隣にいる自身のマスターと一緒にあったから。

けれど絶望的に違う点が存在する。目の前の男からは凡そ【前に進む意思】が微塵も感じられない。それは藤丸というマスターが持つ唯一無二の特性だった、だからこそ差異は浮き彫りになり違和感だけが増す。藤丸は恐る恐ると言った風に手を伸ばし、問いかける。

「貴方は——誰？」

「うん、僕かい？　僕は……『藤丸立香』って呼ばれていたよ」
「！」

衝撃が藤丸たちの間に走った。名前まで同じ。そして雰囲気も、目の色も。違うのは精神的な在り方と性別だけ。

この時、マシュを含む英霊達、そして通信越しに会話を聞いていたロマニやレオ

ナルドはこの特異点の正体を見破った。全員が汗を流し、目の前の少年と英霊を見据える。寂れたカルデア、同じ雰囲気、名前を持つマスターの存在、そして彼を守る英霊。

そう、この場所は——【世界を救えなかったカルデア】、その成れの果てだ。

彼はもうひとりの自分を目の前にして微塵も揺らぐ、ただ飄々とした態度で手にした聖杯を振りながら言った。

「さて、君達の目的は分かっているつもりだ、欲しいのはこの聖杯だろう？ けれど悪いね、これはあげられない、この聖杯は僕が『世界をやり直す』のに必要なんだ」

「世界を、やり直す？」

「うん、僕にはどうしても救いたい人がいるんだよ、もう名前も、顔も思い出せない誰か——その人を救う為だけに、僕は気が遠くなるような巻き戻しをして来たんだ」

そう言つて彼は空っぽの笑みを浮かべた。その救いたい人の名前も、顔も忘れてしまつたけれど、それだけを支えにして此処までやつて来た。今は少し心を立て直す時間が必要なだけ。だから時が来ればまた、聖杯を使って世界をやり直す。何度でも、また『あの人』に出会えるまで、救えるまで。

「その人を救うまで僕は止まらない、止まらない——だから申し訳無いのだけれど諦めて帰ってくれないかな？」

「……貴方は、世界を救う事を諦めていないの？」

藤丸がそう問いかけると、少年はきよとした顔で目を見開き、それから思わずと言つた風に笑つて答えた。

「世界？　世界か……いやあ、そんなスケールの大きい事は考えた事が無いなあ、ただ僕はその人を救いたいただけだったから、世界を救おうとか、そんな大それた事を考えた日は無いよ、君には悪いけれどね」

「ッ」

どこまでも空っぽな瞳、笑み。藤丸は目の前に立つ少年の存在に肌が粟立った。一体どれだけの時間を巻き戻したのだろう、凡そ真つ当な旅路ではなかった筈だ。

たった一度の旅、藤丸はその旅程であらゆる経験を積み、成長した。それを何度も何度も――目の前の少年が持つ魔力の質、感じる威圧感、雰囲気、どれをとっても強者のソレ。下手をするとな英霊よりも上等だ、魔術師として自分と比較するならば正に天と地の差が存在した。

目の前の藤丸立香は『英雄』として完成している。

けれどそれはあくまで【器】だけだった。その精神は既に汚染し尽くされ、壊れてしまっていると思った。そしてその見立ては正しい筈だ。

「コイツに何を言っても無駄よ、何をするにしても『あの人』、『あの人』、たった一人を救うために何度も世界を繰り返して、挙句の果てに世界そのものを歪めちゃう程の馬鹿ですもの」

竜の魔女は顔を顰め、呆れたように吐き捨てる。それを聞いた藤丸は申し訳無さそうに口を緩め、「相変わらず厳しいなあ」と笑った。それは元の人格、その名残。彼の笑みは別の世界の藤丸と全く同じ、見る者を安心させるような温かさを孕んでいる。けれど一度目を見開けば、深い奈落の様な無機質が此方を捉える。そのギャップが余りにも恐ろしい。マシユは思わず自身のマスターである彼女を見た。

彼は彼女のIF、あり得たかもしれない未来だから。

「けど俺は嫌いじゃないぜえ、そういう馬鹿？ 成し遂げられるのなら成し遂げるべきだ、最初は何も持たない平凡な人間だったのに、その想いだけで此処まで血反吐はきながら這って来たんだ、その努力、想い、根性だけは誰にも否定できねえだろう？ 英雄になれない俺からすれば大躍進だ、そりゃ応援もしたくなるってもんよ！」

けらけらと笑ってそう言うアンリマユ、巖窟王だけは独り何も言わず佇むだけだが、その戦意が己に向けられている事を他世界の藤丸は知っている。「他に、英霊はいないの？」と彼女は問いかけた。彼女のカルデアには百を超える英霊たちが集っているから。けれど此処には目の前の三人を除いて他に英霊の姿はない。無論、反応も。

すると彼は寂しそうに肩を落とし、呟いた。

「最初はね、沢山いたよ、多分君と同じ様に、沢山の英霊達と旅をした——けれど段々と召喚に応じる英霊が居なくなって、今はもうこの三人だけさ」

そこには英霊達に対する恨みつらみはなく、ただ居なくなってしまっただけ寂しいと

いうシンプルな感情だけが見え隠れしていた。藤丸にはその感情が良く理解出来る、彼女も同じ立場なら『寂しい』とは思うだろうけれど、消えてしまった英霊に對して恨み言は口にしないだろう。そしてそれは彼も同じ様だった。

しかし他の英霊の事を口にしたらからか、アンリとジャンヌが拗ねた様に口を尖らせる。

「なによ、私達だけじゃ不満だって言うの？」

「そりゃあヒデエゼ、手前で呼んだ癖によおマスター」

「まさか、不満なんてないよ、寧ろこんな僕に付き合ってくれている皆には感謝しているんだ、本当さ、こんな僕は英霊に見捨てられて当然……だと言うのに君達だけはずっと僕と一緒に戦ってくれるのだから」

「——マスター、お喋りはその辺りにしよう」

盛り上がる藤丸、アンリマユ、ジャンヌを他所に巖窟王が告げる。啞えていた煙草の火を指先で押し消し、それから足元に吸い殻を放って踏みつけた。鋭い眼光が異なる世界の藤丸を射抜く。瞬間、凄まじい圧力を感じ思わず喉が引き攣った。ただのサーヴァントではない、聖杯のバックアップを受けているのだろうか？ 背

後に立っていた英霊達がすぐさま飛び出し、マッシュが目前で盾を構えた。それを前に巖窟王は恐れず前に足を進め、告げる。

「退かぬと言うのなら撃退するしかない、我がマスターの歩みを阻む者、その悉く打ち払い、その鋼の意思を貫き通す道を創るが召喚された英霊の役目——その上で問おう、貴様等はどうする？ 戦うか、否か」

「ッ……先輩」

マッシュが唇を噛んで藤丸を見る。彼女はその視線を受け一度肩を揺らし、それから盾越しにもう一人の自分を見た。

傷付き、疲れ果て、それでも尚終わりの見えない戦いに挑もうとするこの世界の藤丸。その在り方は自分に良く似ている、それはそうだろう、別世界とは言えもう一人の自分なのだ。けれど彼女には確信があった——【彼は永遠に世界を救えない】という確信が。

実力は伴っている、精神力もある、仲間もいる、けれど悲しいかな、繰り返す時間の中で彼の願望と想いは根底から捻じ曲がってしまっていた。故にその願いを正しく聖杯が叶える事は無いだろう。きつとそんな事は彼自身、ずっと前から気付

いているのだ。そして彼に従う英霊達も。だからこそ思った、『終わらせるべきだ』と。それが彼に対する最初で最後の慈悲、そして与えられる結末だった。

「——貴方を倒します」

言葉は思ったよりもすんなり口に出せた。両手を胸の前で組み、強く握り締める。「きっと此処で放っておけば、貴方はずっと苦しむ事になる、それだけは駄目だ——もう十二分に頑張った、私はそう思うの、だから……此処で終わらせる、貴方の旅は此処が終着点だ」

「……そうか」

少年の藤丸は寂しそうに呟き、頷いた。そして徐に聖杯を自身の背後に投げ捨てると、そのまま魔力を放出した。その余波で周囲の空気が軋み、マッシュが盾を構えながら呻き声を上げる。凄まじい圧だ、一体どれほどの魔力をその身に宿しているのか想像も出来ない。

「なら戦おう——戦って、君達を乗り越え、僕の戦いが、全てが無駄ではなかった事を証明しよう」

一步、また一步踏み出す。そして彼に続く形で巖窟王、アンリマユ、ジャンヌも

進み出る。藤丸に味方する英霊達もまた、魔力の圧を物ともせずに進み出る。マシュは藤丸を守りつつ、鋭く前を見据える。

「君達は世界を救ったんだろう？ 凄いや、僕には出来なかった事だ——けれども僕だって数多の死線を潜り抜けた自負がある、誰も助けてはくれなかった、だから自分で切り抜ける必要があった、何十もの英霊が担う役割を己の身ひとつでこなして来たこの力、例えば【世界を救った僕】が相手でも、負ける気はしない」

「アンタたちみたいに戦力一杯で余裕綽綽なんて状況は一度も無かったわ——甘ちゃんの貴方達が楽々人理を修復している間、私達は血反吐を吐いて戦っていたの、ひとりでサーヴァント複数相手はザラ……格の違いっていうものを教えてあげる」

「シンッ、さあーて、いっちゃ死んでますかア！ 一応言っておくけどさ、手加減してくれても良いんだぜ？ 俺はマスター含めてその三人と比べると常識的だからな！」

「この程度の絶望、とうに味わい尽くした——そうだろう、マスター？」

「先輩ッ、指示を！」

「うん——行こうッ、皆！」

☆

この世界の藤丸は恐ろしく強かった。サーヴァントが居ない状況で人理を修復してきたという言葉は嘘でも何でもない。ただの人間が、魔術師が、英霊を越える力を手にするには修羅に落ちるしかなかった。正攻法を極めた、外法にも手を出した、禁術にも邪道にも、兎に角力が手に入るのなら何だってやった。その結果生まれたのは、ただ戦う事だけに特化した現代の英雄。即ち怪物だ、世界を歪めてしまう程の怪物。

率いる英霊よりも使役するマスターの方が強いというのは稀だろう。後方で魔術的支援を行うのが基本的なマスターの在り方。しかし彼の場合、寧ろ率先して英霊達と激突し合う程だった。

最初に沈んだのは自称・最弱のサーヴァントであるアンリマユ。

彼は女性藤丸率いる英霊の一太刀をその身に受け、最後に宝具を発動して——消滅した。

「ああ、まあこうなるよなア、クッソ、分かっていちゃいたが堪えるぜ……！」

マスター、アンタの傍は居心地が良かった、アンタの隣に立っている時は自分がまるで英雄みたいな、主役の一人になった様な気分になれたからなア……！　けれど、俺は此処までだ、元々力不足だったし、なにより結局どこまで行っても俺は物語の背景、モブのひとり、良い夢を見せて貰った、ありがとうよ、マスター！」

僅かな後悔すら見せず消えて行く仲間。その顔を眺めながら悲しそうに俯く少年は何を想うか。そして次に落ちたのは竜の魔女であるジャンヌ、彼女は複数体のサーヴァントを相手に大立ち回りを演じたが、藤丸の的確なサポートと数の差に押され致命的な一撃をその身に受けた。それでも尚しぶとく食い下がった彼女だが、いずれ限界が来ると膝を折り恨みが籠った目で敵である藤丸を射抜き、それから背後に立つ少年を見た。

「ふん、つくづく腹が立つわね、アナタ達……まあ良いわ、私は此処までの様だし、後はマスター達に任せましょう、もし次があるなら仕方ないから召喚されてあげる、アナタが挫けたり諦めた時は私の炎で焼いてあげるわ——救ってあげる、それが私の最後の仕事よ、だからまあ精々頑張って足掻きなさい」

指先まで消滅したジャンヌは炎をひと切れ、少年の肌押し付けて逝った。手のひらに残った火傷痕、それをぐっと握り締めた少年は再び戦闘に身を投じる。

そして最後に残った巖窟王と二人、鬼の様な活躍を見せ藤丸率いるレイシフトチームの殆どを消滅させた。それでも尚全滅には届かず、全身から魔力と血液を吹き出しながら巖窟王は消滅する。しかし彼は最後まで膝を着く事を良しとせず、消滅する一秒前まで戦い続けた。

「慈悲など要らぬ、俺も、お前も——故に、貫き通せ、俺は常にお前の傍に居るぞ」
最後まで抗ったが故に、短い言葉。

残った英雄——藤丸は既に瀕死だった。彼は強い、恐らく特異点の中でも特別、元が人間である事を考えれば破格の強さだ。けれどそれでも、ビーストやゲーティアには届かない。彼が世界を救えない、その障害の最たる存在には勝てない。

その怪物に勝利した存在が目の前の少女、即ち藤丸立香。幾人ものサーヴァントを失いつつも、彼女は英雄藤丸を相手に勝利を掴んだ。ボタバタと全身から血を流し、少年は地面を這う。けれど目だけはいつまでも藤丸を捉えて離さない。

最期の瞬間まで彼は、【世界を救った自分】をじっと見つめていた。

「……先輩」

「マッシュ」

死にゆくマスター、その姿を見続ける事に耐えられないとばかりにマッシュが顔を伏せる。藤丸はそんな彼女の肩に手を乗せ、ぐっと唇を噛んだ。

マッシュ、そう呼ばれた少女を見る。その名前を聞いた時、少年の頭の中で誰かの声が響いた。それは酷く懐かしくて、聞いていると泣きたくなるような声だった。

『先輩！』

「――」

脳裏に過る誰かの笑顔。眼鏡の似合う、盾を構えた小柄な少女。常に自分の傍に居て、常に自分を守ってくれて、「大丈夫だ」と励まし、共に辛い旅路を進んだ後輩。大切な大切な誰かの筈だった。その笑顔を憶えている、その声を憶えている、その言葉を――憶えている。

『将来的にはアイコンタクトだけで戦闘、炊飯、掃除、雑談が出来る……そんな関係を目指しています！』

「ああ……君、は」

声が出た。もう喉はその役割を果たしていないと言うのに。地面に倒れ伏し、血の池に沈みながら手を伸ばす。無論、その手は彼女に届かない。けれど再び目を上げた彼女が自分を見た時、その感情は確信に変わった。そうだ、僕が求めていた人、それは。

『好きな物？　空の色とか、地面の匂いとか……好きです』

「そっか」

彼女は救われていたのだ。もう一人の自分によって、違う世界で。

僕が彼女を救う事が出来なかったのは悔しく、悲しい事だけれど、そんな事はもうどうでも良かった。自分が救えなかった彼女がこうして別の可能性の世界で生きて、救われている。それだけで少年には十分だった。

『いきましよう、マスター——全ての命は終わるべきだと彼は言いました、私はそれを理解していましたが認める事はしたくない、私は……先輩のサーヴァントですから』

僕が最期まで誰を求め、何の為に世界を繰り返したのか。

全ては彼女を——救う為に。

少年は顔を伏せ、ぐっと唇を噛み締めた。今にも泣き出しそうだ、涙が零れそう
だ。漸く思い出せた彼女の存在は、けれど知るには余りに遅かった。悲しい、悔し
い、辛い。それを懸命に我慢して伏せていた顔を上げる。少年は彼女の笑った顔が
好きだった、だから自分も精一杯笑おうと努力して。痛みに喘ぐ事もなく、ただ自
然に、純粹に、心から安堵を表現したくて。未だ此方に目を向け続ける愛しい人に
笑いかけた。

表情は不格好だった筈だ、けれど精一杯、太陽の様に笑った彼の顔はマシユの知
るマスターの笑顔そのもので。思わず目を見開き、見つめてしまった。

彼女の瞳に自分が映っている、その事実に関心を奮い立たせ、藤丸は生涯最後の
幸福を噛み締めた。幸福だろう？ だって。

「——そこにいたんだ、マシユ」

彼女は確かに、救われていたのだから。

その言葉を最後に、彼は静かに息を引き取った。

力なく落ちた手、マシユはそれを咄嗟に取ろうとして——けれど滑り落ちた指先は、血の中に沈む。

「先、輩……」

「……………」

マシユも藤丸も、他の英霊達も、何も言わなかった。ただひとりの人間を救おうと足掻き、世界を救えなかった少年の亡骸を前にして言うべき言葉が見当たらなかった。彼は世界を歪めてしまった、けれどそれが悪に依るものかと問われれば——それは違う。

「……この【先輩】には私がついていませんでした、それは、何故なのでしょうか」
座り込み、血に染まった少年の手をそっと握りながらマシユは問いかける。藤丸は彼女の背を見つめながら拳を握り込み、「多分、その【私】が救いたかった人つて言うのは——」と口にして、けれど結局最後まで言わずに呑み込んだ。

マシユは握った手を頬に当て、血が付着するのも構わずにその体温を撫でた。彼の手は暖かった。自分の好きなマスターと同じ、暖かい手だった。目から涙が零れ落ちそうだったけれど必死に堪えた。代わりに言葉を贈る、『在り得たかもしれない

ない、もう一人の先輩』に向けて。

「おやすみなさい、先輩——どうか良い夢を」

マシユの瞼に、少年の様に笑うマスターの顔が浮かんだ。

吸血姫の方が滞っていたので、謝罪も兼ねたPC小説放出です。

パソコンに死蔵されていた小説です。本当はプロットだけ書いて放置しておく予定でした……しかし当時F G Oをクリアしたばかりの頃の熱に負けて筆が迸り……その場の勢いって凄い。

二次創作は本当に書けない人間なので設定、キャラの言動等、粗があると思いますが素人の自慰作品という事で目を瞑って頂けると幸いです。尚続編はありません

特異点IF:失われた色彩、取り戻す為に

HDDにプロットと設定の残滓が転がっていました。FGOの死蔵小説は多分もうない……ハズ。

「ゲーティアの第三宝具、展開を確認——あれは……止められませんね、マスター」マッシュは苦々しい表情でそう口にした。体は今までの戦闘で傷だらけで、息は荒く肩を激しく揺らしている。見上げる天体、人類の歴史を編み上げた転輪、輝くソレはマッシュと藤丸の二人を明るく照らす。暗雲立ち昇る漆黒と赤の中で、あの光だけは神々しさを失っていないかった。

最後の令呪が効力を失う、掌にあった三画、その残滓が淡く粒子となって消えた。魔力は出し尽くした、手札も切り尽くした。滝の様に流れる汗を拭う事もせず、藤丸はその場に崩れ落ちる。地面に這い蹲りながら頬を地面に擦り付け、自分を見下

ろすゲーティアを見た。

「——つまらん、何故受け入れる、マシュ・キリエライト」

「……ゲーティア？」

マシュは盾を杖代わりに震える足を叱咤する。そして黒幕——ソロモンの名を騙っていたゲーティア、その彼の声に顔を上げた。マシュは自分を見下ろす恐ろしい風貌、その奥から唸る様に響く声に目を見開いた。

「私はお前を理解している、お前も私を理解出来る筈だ、我々は共に生命の無意味さを実感している、限りある命の終わりを嘆いている……」

ゲーティアは両手を広げ、天を仰ぎそう口にした。まるで遙か遠い空に今までの記憶を映し、その光景を反芻しているように。指の一本を折り曲げ、僅かに力を籠める。そしてその瞳とも呼べない光がマシュを射抜いた。

「そうだろう？　未来などつまらない、人間はつまらない、だって生きていても死ばかりを見る、どのようなものであれ死に別れる——もう沢山だ、死の無い惑星の誕生はお前の望みでもある筈だ」

マシュは思わず口を噤んだ。それは僅かでも、彼の紡ぐ言葉に共感を覚える自分

がいたからだ。その背後で藤丸は何も言わず、ただマシユの背中を見守っていた。

「わずか一柱だが——我々にはまだ、迷いがある」

「ただ一人で良い、ヒトによる理解者が欲しい、そうであれば我らの計画はもはや揺るぎないものとなる」

「マシユ・キリエライト、人によって作られ、じき消えようとする命よ」

「共に人類史を否定してくれ、我々は正しいと告げてくれ、ただ一言、『よし』、と言え、その同意を以て共に極点に旅立つ権利を与えよう」

ゲーティアはそう言ってマシユに向かって手を差し出した。その口調は今までのどの言葉よりも優しく、暖かなものだった。マシユは差し出された手を見つめ、それからそっと目を伏せる。その表情は悲し気で、どこか痛々しくもあった。

「ゲーティア——貴方は」

「貴様も知っている筈だ、藤丸、彼女の命はもう、疾うに限界だと」

マシユの言葉を遮る様にして彼は続ける。藤丸は震える腕を酷使し、ゆっくりと立ち上がろうとしていた。けれど何度も失敗し、その度に顔が砂に塗れる。そんな無様に足掻く男を、ゲーティアは静かに見下ろしていた。

「隣人を尊び、友人を信じ、同胞を愛する、それが人間の正しさであるというのであれば邪魔をするな……我々のうちの何者かが彼女を見過ごせないと告げている、この星の最後の記録を悲劇にはしたくないと——貴様とて同じだろう？　どうあつても人理焼却は覆らない、どうせ死ぬのならマシユひとり救うべきではないかね？」

「ゲーティア……」

藤丸の喉奥から唸る様な声が響く。マシユはそんな藤丸を一瞥し、それから悲し気に目を伏せたまま口を開いた。その盾を握る手に、力はもう籠っていないかった。「そうでしたね、貴女はずっと、私にそう問いかけて来た……確かに死が約束されている以上、生存は無意味です、私は貴方の主張を否定する事はできません」

「——では」

ゲーティアの声がほんの僅かに、弾む。

その言葉の先を幻想し、肯定を夢想した。

けれどマシユはゆっくりと、静かに首を左右に振る。その表情は悲し気であり、嬉し気であり——同時にどこか満足そうでもあった。

「……でも、人生は、生きているうちに価値の出るものではないのです——死の無い世界、終わりのない世界には悲しみもないのでしょうか——でも、それは違うのです、永遠に生きられるとしても私は永遠なんて欲しくない、私が見ている世界は、今、ここにあるのです」

マシュの盾が地面に打ち付けられる。それを支えにして崩れかけていた膝を立て直す。震えは止まらない、疲労は濃い、痛みは酷い、けれどまだ——諦めてなんて、いない。

「……たとえ、私の命が瞬きの後に終わるとしても」

ゲーティアの手がそつと退く。そして乗せられなかった手のぬくもりを幻視するように、ゆっくりと握り締めた。

マシュはそんなゲーティアに向かって白い華の様に笑う。穢れ無き、無垢の微笑み。

何一つ悔いなど無く、偽りなど無く、心の底から彼女はそう想っているから。

「それでも私は、一秒でも長く、この未来を視ていたいのです」

「——」

ゲーティアはもはや何も言わなかった。ただ差し出した手を胸元で握り締め、もう一度天を仰いだ。彼の心情は分らない、ただ立ち上がったマシュに続く形で藤丸も地面に強く手を打ち付け、震えながら必死に立ち上がった。

そんな藤丸の前に——白く、華奢な手が差し出される。

「先輩、もう一度、手を握って下さいますか？」

「……ああ、勿論」

マシュの手と藤丸の手が重なる。

ゲーティアと重ならなかった、小さな小さな、命の手が。

「——残念だ、本当に」

地に響く様な声だった。ゲーティアはもはや情を捨てた、悲劇の記録を良しとした。ゆっくりと振り上げられる腕。その頂点で転輪が輝く。眩い白が世界を覆っていく。不気味な唸り声を上げて転輪が廻る。

「では、この時代と共に燃え尽きよ、第三宝具、展開——惑星を統べる火を以て、人類終了を告げよう、さらばだ人類最後のマスター、そしてマシュ・キリエライト」
ゲーティアの頭上に黒と白の球体が渦巻き、聳え立った。ソレは人類史を焼き

尽くし破壊する極光、それを放つ前兆。もはや避けようのない死の予感、途轍もない魔力の高まりを感じ取る。アレが放たれれば最後、自分達は死を迎えるだろう。否、自分達だけではない、文字通り人類が滅びる。

「お前達の探索は、ここに結末を迎える！」

ゲーティアは叫び、彼の第三宝具が発動した。

対界を超えた対人理宝具——誕生アルス・アルマデル・サロモニスのときたれり、其は全てを修めるもの。

濃厚な死の予感、体押し潰す魔術濃度、圧力、世界が白く染まる破壊の光。

十字を斬った白色が、天照す一本の光柱を吐き出した。視界が白一色に侵される、もう何も見えない、何も感じない、藤丸にはもはやどうしようもない、あの極光が一瞬の痛みもなく自身と人類を焼き尽くすのを見届ける事しか、出来ない。

唯一、繋いだマシユの手の温もりだけを感じる。

けれどそれも、ほんの僅かな時間だった。

握っていた彼女の手が振り解かれ、小さな背中が目の前に飛び出す。

「いいえ、お任せください——マシユ・キリエライト、行きますッ！」

それは唐突だった、本当に予期していなかった。自身を庇い、盾を構えた彼女を

前に藤丸は「マシュ!？」と彼女の名を叫ぶ。けれど彼女は振り返る事無く、迫る極光を見据え、僅かな怯えすら見せず叫んだ。

「だってこれからです、マスター……! 貴方の戦いはこんなところで終わるものではありません!」

そうだ——こんなところで、彼を死なせるわけにはいかない。

沢山沢山貰ったのだ、本当に、色々な嬉しい事を、楽しい事を。

マシュの細腕が盾を地面に突き立てる、心の中で叫ぶは己の宝具——今は遥か理想の城。ロード・キャメロット 叫びは極光の轟音と唸りに掻き消された。

数多の英雄、その宝具を凌いできた白亜の壁が目の前に聳え立つ。今はなき白の壁、理想と化した無傷の城塞。

そして極光が間髪入れず——着弾。

それは時間が止まった様な光景だった。

光帯の熱量を防ぐ物質はこの地球上に存在しない。だが、それはあくまで物理法則の範疇。彼女の守りは精神の護り——その心に一切の穢れ無く、また迷いがなければ溶ける事も、穿つ事も、壊れる事もない無敵の城塞。

だがそれは——彼女の肉体の破壊と苦痛を対価とする。

「あ、ああああああアアア——！」

地獄の時間が続く。星を貫く熱量を防ぎながら、彼女は想っている。

これまでの旅と、これからの旅を。

自分がいた今までと、もう自分のいない未来の夢を。

白の極光を防ぎ、焼け爛れていく肌を晒しながら彼女は口元を緩める。痛くて仕方ない、苦しくて仕方がない。けれど彼女の心は穏やかだった。ほんの僅かな気の緩みで押し込まれそうになる円卓の盾。それを体全体で支えながら彼女は目を閉じる。

確信できる——自分はこの一撃を、防ぎ切るだろう。

「ああ——良かった、これなら何とかかなりそうです、マスター」

焼け爛れ、盾に張り付いた指先。あと数秒もせずに消滅するであろう肉体。それをただ静かに一瞥し、ゆっくりと振り向いた。そして彼女は美しく、優しく、自身のマスターである藤丸に笑いかける。いつも通りの、なんて事の無い笑顔を。

「今まで、ありがとうございました」

「マシュッ！」

藤丸が腕で顔を覆いながら叫ぶ。見えない、目が、耳が、上手く機能しない。世界は白色だ、辛うじて彼女の姿だけを捉えている。気を抜けば吹き飛ばされそうな暴風、地面に張り付きながら叫ぶ、叫ぶ。彼女がどんな表情をしているのか、そんなのは分かり切っている。だから止める、止めなくちゃならない、何が何でも。

そうしなければ、彼女は――！

「先輩がくれたものを、せめて少しでも返したくて、弱気を押し殺して旅をしてきました――ここまで来られて、私は、私の人生を意義あるものだったと実感しました」

それは宛ら遺言だった。否、それは彼女にとって確かに遺言なのだ。

一秒ごとに削られて行く焼け爛れ、溶けていく肉体。ほんの一瞬、束の間に紡がれる死に逝く者の言葉。藤丸は這い蹲り、一步、また一步と彼女に近付く。極光を防ぎ続けるその小さな背中に、華奢な背中に。

「……でも、ちょっと悔しいです」

藤丸の手が伸びる。

その指先が彼女の背中に――触れる事も出来ずに。

名残惜しそうに、マシユは笑った。

せめて最後にもう一度、貴方の手に触れたかった、なんて。

少し贅沢だろうか、そう思いながら。

「私は守られてばかりだったから――最期に一度くらいは、先輩のお役に立ちたかった」

白の中で微笑んだ彼女、それが藤丸の見た最後の光景だった。

【そうなる筈だった】

これは藤丸立香が歩んだ物語。

彼女を失い、失意に沈み、最後に見た微笑みを忘れられずに繰り返した物語。

そしてその果てに、願いを忘却し、得られず、失い——それでも救いを得た男の物語。

手を伸ばした藤丸の肩に、誰かの手が掛った。

その手は力強く、藤丸の体を後ろに引き戻した。

「彼女を救いたい——僕はただ、そう願ったんだ」

声は直ぐ脇から、確りと聞こえた。

自分と入れ違う形で飛び出した影。それは少しだけ成長した自分の様に見えて

——藤丸は瞠目した。

過去の自分を見た男——藤丸立香は笑う。

未だ極光を支えるマシユの脇を潜り抜け、光の前に飛び出す。マシユは突然の乱入者に驚き、為す術もなく男の横やりを許した。

男は片手に小さな盾を構えていた。

——何年も、何年も、何年も、何度も何度もやり直した。

その小さな盾は男の——藤丸立香の宝具だった。

彼の宝具は欠陥品。

ただ一つの死を避ける為に、ただ一人を救うために。

気の遠くなるような旅路を経て、尚も至る事の出来なかった高み。数多の英雄に背を向けられ、独力で至る限界に達し、それでも尚成し遂げられなかった『夢の城』

——嘗て世界すらも呑み込み、無限の回廊を生きた少年の人生。悲嘆

それを織り交ぜ、一人を救うただけに作り出した薄く、冷たい、小さな盾。

とても大勢を救える盾じゃない、己が身すら守れるか怪しい。けれどそれで良い、この小さな盾は少年の魂——ただ一人を救うために存在する、その一人には自分が入っていない。

彼の宝具はマッシュと同じく、『精神』と『肉体』に作用する。

精神が屈しなければ決して貫通しない、けれど見てくれは彼女の盾と比較しては余りに貧弱。薄く、小さく、頼りないそれは憧れた彼女の様に美しくも無ければ高潔でもない。白亜と呼ばれた純白の精神には及ばず、己の心は俗と欲に満ちている。故にその守りは鉄壁でなく、聳え立つ壁は脆く柔い。

けれど、それでも。

確信がある。

自負がある。

己が彼女を求めた永劫に近しい時間は決して嘘じゃなかった。彼女を思う僕の心は誰にも負けない、たとえ神であろうとその精神は曲げられない。

心は鋼だ、必要だから造られた、急造品の鋼。

けれど彼女を求める心は決して折れない、曲がらない。

何故ならそれが彼の生きる理由であり、足掻き続ける理由であり、死して尚果たせなければならぬ『願い』だからだ。

【救えなかった数多の僕が願った】——『その果てに救いを果たした、一人の少年』
全てはこの時、この瞬間の為に。

彼女を想う心だけは『白亜』穢れ無き願望であると、僕はそれを此処に証明する。

掲げるは盾、白亜の証明。

未だ迫る極光、背後には守るべき君と僕。いまは通か理想

それが在れば——十分だ。

両足を踏み締め、盾を構え、突貫する。

この盾と心——そして繰り返した歴史を捧ぐ。

「【L o r d k y r i e l i g h tいまは遥か白亜の君へ】」

極光と、飛び出した鈍色が衝突した。

それは太陽と地表が炸裂したような光と轟音だった。衝撃でマッシュが盾を残して後ろに弾き飛ばされ、藤丸が辛うじて抱き留めた。所々に見える火傷痕、剥がれ落ちた皮膚、あと数秒遅ければ彼女の傷は致命的になっていただろう。

真っ白な世界の中で二人は見つめる。

浅黒く変色し、分厚くなった少年——青年の背中を。

「君、は、っ……！」

「——」

藤丸立香が辛うじて口を開く。けれど青年は答えない、答える余裕すらない。ただ一ミリたりとも退きなどしないと決め、齒を食いしばり、爛れいく指先を眺める。この宝具は開帳すれば最後、止める事は出来ない。否、正しく言うのならこの

宝具は常に展開されている。自身が【守る】と決めた瞬間から。

己が靈基を崩し、消費し、この場にある己が存在全てを懸けて守り通す。魔力の消費なんてものではない、文字通り己の人生を消費し、防ぐのだ。彼女を探し求め繰り返した日々——世界、時間、それらを一秒ごとに食いつぶし、生き永らえる。その為だけに生きて来た、この時の為だけに力を求めた。

全ては、そう。

——君に笑顔を、君にカルデア故郷の空を——君を救う為に。

構えた盾が徐々に焼き切れ、表面が溶け落ちる。頭が割れる様に痛い、指先から体か溶け落ち皮膚が捲れあがつて赤熱する。けれど手が無くなれば肘で、肘が無くなれば肩で、肩が無くなれば顔面で盾を支えよう。たとえ記憶を失おうとも、存在を失おうとも、この心だけは失わない。

『先輩』

背後を見た、自分を見上げ、驚愕の表情を張り付ける彼女。

その姿を見た瞬間、思わず笑みが零れた。

誓ったのだ、二度と忘れないと。そのための復讐者アヴェンジャー、その為の忘却補正。自身

の根底には常に彼女の笑顔があった。それだけを追い求め世界を繰り返した。何度も何度も、気が遠くなり、精神が擦り切れる程の旅路を！

彼等に自身の触媒はなく、召喚もされていない。けれど縁^{えにし}ならばある、何せ自分と同じ存在、【救えなかった筈の自分】だ。過去を変える事は禁忌か？ だとしたら何だ。

一歩、押し込まれ気味だった足が進む。

食いしぼり過ぎた奥歯が砕け、指先が第二関節まで溶け落ちた。内臓が震え破裂寸前、眼球は今にも潰れそうだ。肩ごと盾に叩きつけ、肉の焼ける匂いを嗅ぎながら笑う。血を吐きながら笑う。存在と記憶を失いながら笑う。

嘗て共に歩んだ錬鉄の英雄の言葉を思い出して。

——けれど決して、間違ひなんかじゃない。

押し込んだ盾が極光を割った。

光は左右に裂け、周囲に凄まじい蒸気が吹き上げる。

そしてカラン、と硬質的な音。彼の盾が溶け落ち、地面を叩いた音。

「——馬鹿な」

ゲーティアの声が響いた。

吹き上げる蒸気、そしてそれが晴れた頃に見えるのは聳え立つ円卓の盾、そして蒸発したマシュ・キリエライトの肉体——ではない。

全身を赤熱させ、血を撒き散らしながら【人類焼却の極光】を凌いだ、たったひとりの青年の姿。溶け落ちた右腕、そこから赤い血と粒子を撒き散らしながら笑う。その瞳は鋭く、深く、ゲーティアを射抜き告げた。

「——戻って来たよ、ゲーティア、お前を打ち倒す為に」

浅黒く焼けた肌、鍛えられた肉体、過去の名残、礼装の黒いズボン。そして真っ白に色の落ちた髪。けれど顔立ちだけは変わらない、人理を守る為に戦い、旅をした人類最後のマスター。目の前の怨敵が、見間違う筈がない。ゲーティアは立ち塞がる青年を指差し絶叫した。

「貴様はッ……藤丸、立香かッ!？」

「そうとも、僕は【藤丸立香】だ——目の前で最も大切な人を殺され、愚かにも聖杯に願い、何度も何度も世界をやり直した、【世界を救えなかった藤丸立香】だ」

「なんだと……」

こんな事は予測していない、そう言わんばかりに片手で顔を覆い叫ぶ。その間、背後に庇われたマッシュとこの世界の藤丸は言葉を失っていた。ボタバタと失った右腕から赤色が垂れる。マッシュの目にそれが映り、思わず唇が震えた。

背丈が違う、体格が違う、声が違う——けれど確信出来た。

この安心できる背中、放つ雰囲気、どんな困難でも折れず、諦めず、立ち向かう気性。

この人は自分のマスター——藤丸立香だと。

藤丸は目の前に立つ青年の背中から目を離せなかった。分厚い筋肉、放たれる歴戦の猛者、その雰囲気。そして何より、あの人理を焼却する筈だった光帯、その宝具の一撃を防いで見せた。恐らく彼が来なければ——藤丸の背中に最悪の光景が過り、思わずマッシュを抱き締める腕に力が籠った。

ゲーティアは指先越しに青年を睨めつけ、腕を振るい、叫んだ。

「ッ……いや、だとしても、貴様がたとえ時を遡り我々の前に立ったとて、【だからどうした】、一人で何が出来る、所詮、僅かに生き永らえたに過ぎん、結末は変

わらん……！」

「ひとり？ それは勘違いだよ、僕はひとりでこの場に立っているんじゃない」

青年はそう告げ、無事な左腕で盾を拾う。赤く発熱したそれを欠けた指先で確りと握り締め、血塗れの顔で不敵に笑った。その表情にゲーティアは思わず顔を顰める。

そして立ち昇る蒸気を裂き、座り込んだ藤丸とマッシュを庇う様にして現れる影が、三つ。青年は振り返らなかった、座り込んだ二人の脇を通り抜け、自身の背後に立った三人が誰かを瞬時に理解した。そうだ、彼等しかない、永遠に等しい時を共に過ごした仲間とは。

「——よおーマスタあ、久しぶりじゃん？ 随分ヤバイ恰好してるねえ、血化粧？」

「あー、もう、最悪、これ絶対疲れる展開じゃない、ちょっとアンタ、勝てる見込みあるのよね？」

「お前はつくづく……苦難と絶望に愛されていると見える」

アンリマユは嗤った。

ジャンヌダルク・オルタは小突いた。

巖窟王は覚悟した。

蒸気を切り裂き現れた三人は、ごく自然な形で青年の隣に立った。まるで長年連れ添った親友の様に、何の気負いもなく、それが当然の事の様に。

アンリマユは青年の血塗れの恰好を嗤い、オルタは目の前の強敵を見据え面倒そうに顔を顰め、巖窟王は少年の因果を垣間見て口元を歪める。

彼等に互いの記憶は存在しない。それはこの世界とは別の、全く異なる世界の縁故に。けれど彼等の霊基、その奥底に眠る【ナニカ】がそうさせた。三人は魔人柱との戦闘でボロボロで、とても万全の状態ではない。けれどこの青年の隣に立つだけで何か、言い表す事の出来ない力が湧き上がった。『やらねばならない』と思った。三人の脳裏に、見覚えのない光景と『此処ではないカルデア』の映像が過る。廃れ、汚れ、見捨てられ、世界の片隅を漂った故郷。皆が見限り、捨てて行った未来。そんな世界で足掻き続け、己自身によって救われた少年の物語。

世界を救った『藤丸立香』——その下に積み重なる、【世界を救えなかった藤丸立香】。今度は自分が救う番だ。全員がその意志を汲み不敵な笑みを浮かべ、ゲーティア

と対峙した。それを苛立たし気に見下ろし、吐き捨てる。

「——たったそれだけの力で何を為せる？」

英雄達

「確かに、僕に残った力はこれだけだ、あれだけ結んだ縁はこれしか残っていない——けれど此処には彼が居る、藤丸立香【僕に世界は救えない】、だから僕達がやるのは時間稼ぎで良い、分裂し、思考し、自己を確立した【お前】が仲違いをするまで……或は星の数ほど存在する、数多の英雄の縁が結ばれるまで、『僕』には無理でも【彼】なら出来る」

「世迷言を……ならばそのちっぴけな英雄と共に我が第三宝具の劫火に焼かれるが良い！」

「何度でも防ぐさ、防いでみせる——その為に僕は此処に居る」

青年は告げ、片腕で盾を掲げる。

この脆く薄く小さな盾は自身の歴史の証明。藤丸立香という世界を救えなかった少年が、たった一人の少女を守る為に生み出した、苦難と困難と後悔と悲嘆の結晶。藤丸立香はひとりの少女を想い続ける。

それ故に盾は壊れる事無く、この身消え去るその一瞬まで人理焼却の光を防いで

みせよう。

左右に並んでいた三人が身構え、地面を踏み碎きゲーティア目掛けて飛び出す。青年もまた、盾を構えたまま突貫する。最後に一瞬、肩越しに二人を見る。

そして自身に手を伸ばし、何かを叫ぼうとしているマシュを見つけた。

その表情に思わず顔を崩す。最後の瞬間、自分はある顔で手を伸ばしていたのかもしれない。

——だから今度は僕の番だ、絶対に救ってみせる、誰の手でもない、『僕自身』の手で。

迫るゲーティア、振り上げた拳が突き出した盾と激突する。この世のモノとは思えない衝撃と、爆音。それらをものともせず、青年は嘗てのサーヴァントと共に挑んだ。

己の越えられなかった存在に。

そして今、己の超えるべき存在に。

「覚悟しろゲーティア、今度こそ僕が、僕自身が彼女を救ってみせる——これが僕にとって最後の復讐^{アベンジ}だッ……！」

「否、完遂はあり得ない、お前達の探索は今、ここで、終焉を迎える！」

救いを得た者、救いを得られなかった者。

この世に存在する数多の【世界を救えなかった藤丸立香】、その後悔と悲壮の感情、願いによって生まれた存在。彼はひとりであって一人に非ず。ただ異なる世界に於いて全ての藤丸が絶望した事柄、『マシユ・キリエライトの消滅』を阻止する為だけに存在する。

ただ主格となる人格は存在しており、その核は聖杯を使い何度も世界を繰り返して彼女を救おうとした、既に消えてしまった遠い世界の【藤丸立香】。救えなかった数多の彼が悲壮と後悔を押し付け、その執念と想念が彼を英霊モドキとして押し上げた。

他ならぬ数多の世界の自分自身が自身を英霊たらしめる信仰者である特異な存在。ある意味、マシユの消滅という藤丸立香にとって到底耐えられない結末があらゆる世界に存在するからこそ生まれた。

彼はあらゆる世界の『マシユ・キリエライト』を救うだろう。

そして星の数に勝る世界の彼女を救い続け、その願望が成った時、彼は『正規の手順で英霊となるであろう藤丸立香』にその席を譲る形で消滅するのだ。

けれどそこに、悲壮や後悔はない。

ただ彼女が笑う世界があるのなら、それで良い。

「……サーヴァント、復讐者、アヴェンジャー召喚に応じ参上したよ」

「！——君は……そうか、此処は『あの』カルデアか」

「生前は世話をかけたね、お蔭でこうして——英霊モドキだけど、夢を叶える事が出来た、ありがとう」

「……………」

「えっと、僕としてはもう果たすべき願いを成就したから、もうやる事なんてないのだけれど……もう信マシユを失った世界仰者はないし、僕、必要かい？」

「……………まあ、君がそう言うなら」

「ああ、それじゃあ一つ大事な事を聞きたいんだ……『マシユ・キリエライト』、此処にはいるかい？」

「！ そっか、良かった」

「いや、自分で言うのも何だけれど、ちょっと色々頑張ったからさ——」

「今少しだけ、声が聞きたいんだ」

特異点・カルデア 【世界を救えなかった少年の話】

著者 トクサン

発行日 2019 年 10 月 18 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/171341/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。